

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350061

研究課題名(和文)日本の伝統的染織技術の持続可能なテキスタイル・デザインへの展開に関する研究

研究課題名(英文)A Study on Manufacturing Techniques of Traditional Japanese Textiles toward Sustainable Design

研究代表者

深津 裕子 (Fukatsu, Yuko)

多摩美術大学・美術学部・准教授

研究者番号：20443145

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本の伝統的な染織技術を持続可能なテキスタイルデザインに展開することを目的に、地域社会での調査を基盤に、ものづくりに帰結しないライフスタイルを含めた包括的なデザインとは何かを検証した。日常使いの籠をデザインすることにより、異なる産地、文化、素材、人を繋いだハイブリッドなデザインを実践し、伝統的な素材と制作技法の解釈と継承、環境に負荷をかけない制作手法を探索した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to translate manufacturing techniques of traditional Japanese textiles into sustainable textile design in our times. On the basis of fieldwork at local communities, not only designing colors and forms of textiles but also holistic design including lifestyle were discussed. Exploring traditional materials and manufacturing techniques, and an ecological design method, we carried out to make baskets with hybrid design combining different areas, culture, materials and local people.

研究分野：染織史

キーワード：テキスタイル 持続可能性 ものづくり 地域社会 エコロジカル 繊維素材 染織技術 文化資源

1. 研究開始当初の背景

我が国の文化財保護活動は早期から行われ「文化財保護法(1954)」「伝統的工芸品産業の振興に関する法律(1974)」などにより染織を含む工芸技術が保護されてきた。これまでに多くの染織技術を保持する個人および団体が重要無形文化財に指定されてきた。そして我が国の芸能や工芸技術の変遷を知る上で重要であり、記録作成や公開などを行う必要があるが重要無形文化財に指定されていない無形の文化財については、記録作成などの措置を講ずべき無形文化財として選択し国が自ら記録作成を行い、地方公共団体が行う記録作成や公開事業に対して助成を行ってきた。また UNESCO で 2003 年に採択された無形文化遺産条約では、小千谷縮・越後上布(2009)、結城紬(2010)が一覧に記載された。

しかしアジア圏では需要と供給のバランスの崩壊や経済的困窮、後継者の不在等、時代や社会の変化に即応できなくなった多くの伝統的な染織技術が消失してきたことも事実である。伝統的な手工芸品の多くは現代社会において民芸品、土産物、和装小物などとして非日常的なものとなってしまった。一方、現代社会では環境問題に配慮した天然素材のオーガニックコットンなどを始めとするエコロジカルなテキスタイルの需要が高まり、大量生産や消費社会に対する疑問が提唱されてきた。ファッション業界でもフェアトレード、リサイクルポリエステル等の活用、テキスタイルの加工に用いる薬品制限等、様々な持続可能な社会を形成するための配慮が推進されてきた。また環境 NGO による地域社会に根ざした自然環境再生プロジェクトなども知られる。

研究者らはこれまでの研究成果や教育活動を通じ、文化財資料に対する学術研究を基盤に、日本の染織技術保持者および地域社会と現代のテキスタイルデザインに関する動向や情報を共有し、伝統的なものから新しいものを創生すること、現代の生活に活用できるようなものづくりに関する研究の必要性を認識した。伝統的な染織技術は衰退する一方であるが、現代社会で注目されるエコロジカルなテキスタイルプロダクトと照合すると、両者は持続可能なものづくりの条件を満たすことで共通する。従って日本の伝統文化に内在した技術や英知を、時代に即応したデザインやコンセプトと結びつけることにより、再活用の可能性が見込まれた。

研究者らは、多摩美術大学の共同研究「バナナおよび未利用繊維の素材活用システムの構築」に共同研究者として参加した。これは熱帯地方を対象とした未利用繊維(バナナの果実を収穫後に伐採・廃棄された偽茎から抽出する繊維)から布を制作する未利用資源の開発研究を行い、研究成果を熱帯地方の国々に普及させる途上国支援活動である。これらの海外支援活動を通じ、改めて地域社会との信頼関係や密接なコミュニケーションを形成

した上で研究、自国のテキスタイルを対象とした基礎的な研究の重要性を認識した点が、今回の研究立案の大きな要因である。従って日本の伝統的な染織品に内在する技術や英知を再認識し、持続可能な日本社会のためのテキスタイルプロダクトのデザイン研究を提案するに至った。

本研究ではアジア圏にみられる伝統的な染織技術のうち、日本の絹や植物繊維を原料とする染織品および染織技術を研究の対象とした。養蚕・植物繊維による布製作は 20 世紀以降激減し消滅したものも多い。これらは記録・保存すべき対象であるとともに、現代社会で新しい価値観と創造力のもとに継承するに十分な価値を有する。

2. 研究の目的

本研究は文化資源の保存研究にデザイン的手法を組み込み、分野横断型の新たな研究スタイルを構築し、その成果を持続可能な社会づくりに応用する提案までを目的とした。具体的な研究の対象は、日本の地域社会に根ざした繊維によるものづくり、染織技術および染織品である。伝統的な染織品の多くは天然素材を使用し最小限の動力により製作されるため、地球環境に負荷をかけないテキスタイルプロダクトの生産が可能であり、衰退する伝統技術の救済に繋がると考えた。また伝統的な技術保持者の多くは手工業の衰退に伴い困窮するケースが多いが、伝統に内在する技と英知を見出し持続可能なテキスタイルプロダクトに応用展開することで、新しい伝統を創生しながらものづくりの新しい価値観の提案を目指す。

3. 研究の方法

- (1) フィールドワーク：伝統的染織技術の聞き取り調査と記録、地域文化や環境に関する調査、実物資料の収集
- (2) フィールドワークの検証：染織技術の特性・地域性・持続可能性・デザイン性の検証、伝統的な染織品が非日常的なアイテムとなった原因の究明と改善策の提示
- (3) 市場調査：現代社会における消費者の動向や趣向の調査
- (4) テキスタイルデザインの提案：地域資源を活用しかつ日常生活で使用できるようなものづくりとデザインの提案

4. 研究成果

- (1) 自然の恵みを活用したものづくりとエコツーリズムに関する調査(沖縄県八重山郡竹富町西表)

西表島は、沖縄県八重山郡竹富町に属する八重山諸島最大の島で 90% が亜熱帯の自然林で覆われ独特の自然生態系を維持している。豊かな自然の恵みは伝統的な染織資源の宝庫でもある。その北西部の祖納集落には今でも古くからの生活文化や儀礼・芸能が継承されるコミュニティがある。研究者らは紅露工房

において石垣昭子氏より糸芭蕉の繊維の採取法、糸績法、染色法を、石垣金星氏より染料となる植物の採取法、藍の生葉染法等の指導を受け、自然に寄り添ったものづくりとライフスタイルのあり方を学んだ。また2014年に沖縄県エコツーリズム推進協会主催のワークショップに参加し、地域社会における先端的な文化資源、天然資源、観光資源を結びつけた取り組みについて取材した。また琉球大学熱帯生物圏研究センターの高相徳志郎教授が、地域住民と共に西表島の在来植物の植樹活動を行うことにより島の生態系や環境を保全する活動を取材した。西表島では住民が各専門領域からのアプローチで、各種資源の保全と有効活用を行っていた。

先端的な取り組みがなされる一方で、伝統的な手仕事については人材不足および人材の高齢化が否めなかった。熟練の技術が要求され、根気と手間のかかる地味な糸づくり等を次世代に継承できるか否かが文化資源の存続に関わる重要課題である。大量生産と大量消費が当たり前となった現代社会において、手仕事や天然素材への評価が依然として低いことは事実である。伝統的な染織技術を継承するためには、確かに人材不足や技術者の高齢化問題を解決することが重要であるが、現代社会が抱える課題と繋げて統括的に解決していく必要があるのかもしれない。

(2) 伝統的な養蚕技術に即した絹織物制作に関する調査(長野県上伊那郡飯島町飯島)

京都の西陣に本社をおく勝山織物株式会社は1891年に創業した呉服商で、周山と長野に工房をもつ。長野絹織製作研究所は、国内でも養蚕に最適な場所として知られる南信州の伊那盆地に所在し、桑畑の管理から養蚕および織物づくりまでの全ての工程を社内で行い高品質の絹織物を研究開発していた。絹織製作の研究開発者である志村明氏から伝統的な絹織物の製作技術の再現に関する取り組みと、座繰りによる製糸技術に関する聞き取り調査を行った。

絹織製作研究所は飯島の廃園となった保育園を活用しており、近郊に広大な桑畑を所有し自然と共生しながら化学肥料や薬品を用いず、蚕の飼育から繭の貯蔵、製糸、製織までを一貫して行っていた。一般的な生糸は大量生産の工程で繭を熱風乾燥させ、自動繰糸機や特殊な製糸機で生糸を作る。しかし志村氏は生繭あるいは塩蔵法により貯蔵された繭を、日本古来の生糸の繰り方法を研究しながら座繰りで挽くことで、昔ながらの絹糸の質感を探究していた。絹糸は植物染料で染色され、着物地や服地に製織される。志村氏は自ら絹布の着装時の着心地を確認する実験や、科学的な評価試験を行いながら研究を継続していた。これらの研究成果は勝山織物の着物地の品質向上に貢献し、従来の絹織物の品質および質感や光沢を刷新した絹織物が普及してきた。志村氏の研究手法は、養蚕から絹布の製作までの全工程を手作業で行われる。このよ

うな持続可能な織物製作の手法は、産業革命以降の工業機械による大量生産および大量消費社会において消失してしまった。日本では幕末から明治時代において西洋の染織技術が導入され、日本独自の伝統的な染織文化が変容していった。さらに昭和時代の高度経済成長以降は既製品の大量生産、使い捨てによる大量消費、低コスト商品が氾濫し、手仕事による伝統的なものづくり技術は消失していった。しかし、1980年代以降に持続可能な社会のあり方が問われ始め、真の豊かさを求めたエコロジカルなライフスタイルのあり方が議論されてきた。このような現代社会の状況下で、改めて持続可能なものづくりのあり方が評価される時がきたと考えられた。

(3) 葛植物を活用した布作りの変遷に関する調査(静岡県島田市金谷河原)

静岡県では掛川葛布織物組合に登録された岡本葛布工房(三福工業有限会社、明治26年創業)、小崎葛布工芸(小崎葛布工芸株式会社)、川出幸吉商店(明治3年創業)、島田市の大井川葛布(静岡壁紙工業株式会社、昭和25年創業)が葛布製作を継承してきた。静岡で伝承される葛布は江戸時代に掛川宿の特産品であった葛布に由来し、葛芋の光沢を活かすために細い絹糸や綿糸を経糸に、無撚りの葛糸を緯糸に用い平織で製織する点が特徴である。

大井川葛布では、着尺、帯、和装小物、傘、帽子、タオル、コースター等の製作販売を行っていた。これらの生地となる葛布は昭和25年の創業以来製作してきた壁紙や襖用の葛布が基盤となっていた。しかし現在では葛の採取、葛芋の作成、葛糸を作る人材不足が問題となり、昭和時代のような葛製の壁紙や襖紙の大量生産をすることはできない。着尺地、バッグや財布などの和装小物や生活用品についても必然的に高額な商品になるという。

調査の結果、葛布および葛布製品を企画製作するプロセス自体を再検証する必要性が考えられた。葛布は本来、木綿布が浸透する以前の日本の地域社会で、日常に使用する衣類は生活用品として活用されていたが、江戸時代に入り東海道の宿場町であった掛川で地域の特産品として東海道を往来する武家を消費者とした袴や道中着などの生地としての葛布を商品展開したものである。消費者である武家が消滅した明治時代には壁紙や襖張りなどの室内装飾へと葛布の用途と消費者のターゲットを変え成功をおさめた。その後民芸品、土産物、着物、和装小物等に展開し現在に至るが、葛布自体の見直しには至っていない。また葛布がエコロジカルな素材であることをいかに商品展開の可能性やライフスタイルの提案も考えられる。葛布の製織技法や染色および加飾技法などの再検討など、従来の葛布の制作技法や用途および利点をいかしながらも新しいデザインを加えることで、現代社会に即応するようなプロダクトに展開できると考えられた。

(4)ヨーロッパの伝統的テキスタイルの現状調査

ヨーロッパ社会に根付いた素材・伝統的技法の現代的な活用について、企業とデザイナー/アーティスト/職人との関係、テキスタイル教育の現場に焦点をあて、フィンランド、ロンドン、パリで市場調査を行った。

フィンランドの家具会社アルテックでは、芸術とテクノロジーの融合により、モダン家具を追求すると共に、自国の自然と生活に価値を置く姿勢が持続されていた。ラプアン・カンクリット（ラプアの織り手の意）は、国産の良質のリネンを中心に、エコロジカルな自然素材を全ての工程において自社工場で行うこだわりを持ち、使い心地のよい手触りと耐久性を探究したタオルやショール、クッションカバー、ブランケットなどを生産してきた。リネン製品には“MASTER OF LINEN”が授与された。アアルト大学はフィンランド政府がイノベーションを基礎におく大学改革により、ヘルシンキ工科大学、ヘルシンキ経済大学、ヘルシンキ美術大学の3つを統合したもので2010年に設立された。サイエンス、ビジネス、アートを連携させた学際的な教育および先端的なデザイン教育がなされていた。

プロダクトデザイナーのステファン・パークスは、何も無いところから手を動かし創造すること、実体験から現実への工程を重視したデザイン活動、企業や工房、職人とコラボレーションするプロジェクトを多く行い、発展途上国の職人の仕事をグローバルなブランドと繋げる社会的な活動を行っていた。イタリアの有名ブランド、ミッソニーとのリサイクルプロジェクトでは残布を寄せ集め、継ぎはぎ細工を既存のガラスや陶器に施し新しいプロダクトに展開した。またリコンビネーション・バスケットは、セネガルの伝統的な手工芸であるスウィートグラスを材料に、籠編み職人と共にランプやオブジェをつくり販売したプロジェクトである。古くからの興味深い伝統的手工芸のプロセスが現代的なプロダクト製品に組み込まれることで、途上国の地域素材や手法を国際的なデザインブランドの市場へ繋げていった。

フランスのエルメスセーヴル店では、招聘されたアーティストやデザイナーが、エルメスの多彩な素材や職人らの熟練の技と共に作り出したオブジェが展示されていた。実験的なものづくりが本来の伝統を継承したものづくりへと還元されており、企業の中に創造的な循環を生み出そうとする積極的な姿勢がみられた。ロンドンを拠点とする日本人ニットデザイナーTomoko Yamanakaは、かつての国内工業をビジネスモデルにアルパカ農場、小さな紡績工場、ニッターの人達を取りまとめ高品質の製品づくりを実践していた。このようにヨーロッパでは、分野横断型のデザイン活動、古いものと新しいものを意識的に融合させた地域色豊かなものづくりが見られた。またアート&デザイン教育の現場でも、教育

の変革が求められ、伝統的なものづくりの再解釈が促され次世代の社会にむけて実験的に動き出していた。

(5) 国際染織学会における研究成果の発表と意見交換

米国のカリフォルニア州ロスアンゼルスUCLAで開催された北米染織学会の第14回シンポジウム *New Directions: Examining the Past, Creating the Future* (2014年9月10日から14日まで)に研究者らが参加し、研究発表を行うとともに、世界中から集まった会員らと情報・意見交換を行った。研究代表者は分科会テーマ *Alternative Plant Fibers: Preservation, Development, Sustainability* の司会を務め、以下の発表を行った。

Yuko Fukatsu: Traditional Textile Design for Social Innovation Toward Sustainability in Japan

ウガンダ、プエルトリコ、日本で伝統的に活用されてきた植物繊維および制作技術の保護、現代社会における活用の可能性について、現状報告や問題点の指摘および改善策の紹介を含む情報交換とディスカッションを行った。地域や対象とする植物などは異なるが、科学技術の発達した現代社会においてあえて天然資源を再活用する意義や考え方について共感する点が多く、文化や言語を超えた相互理解を深めることができた。ウガンダではイチジクの樹木から採取できる樹皮を熨すことで得られる不織布が伝統的に活用されてきた。これらを衣料のみならずランプシェードなどインテリア関連の素材として様々なプロダクトに活用する試みが実用化されていた。プエルトリコからは伝統的なハンモック作りが紹介され、今日でも生活に必要なアイテムとして活用されていることがわかった。

日本からは、伝統的な葛布が古墳時代中期から現在に至るまでどのように変貌しながらも継承されてきたかが静岡県事例として発表された。研究代表者は、本研究に至った経緯と、日本の伝統的な染織技術を過去の遺産として保護するだけでなく現代社会に活用できるようなものづくりを提案すべきであることを報告した。

ウガンダの樹皮に関してはプロダクトとしての完成度が見られ実用化に成功していた。プエルトリコのハンモックに関しては合成繊維によるハンモックが台頭する中で、マゲイという在来植物から得られる持続可能な生活文化に根ざした必要性が見られた。葛布を含む日本の植物由来の布は、研究者らも調査を行ってきた結果、伝統は継承されているものの「現代社会に合わせたデザインの欠如」という問題が浮き彫りとなった。この問題点は、まさに研究者らが本研究で解決しようと取り組んでいる課題であるとともに、現代日本の伝統工芸品における課題でもあり、持続可能なデザインの重要性を再認識した。

(6) ひらめき ときめきサイエンス ようこそ大学の研究室へ「バナナの葉っぱや草で地

球にやさしい布をつくろう」

本研究の成果を小学生にデザイン&環境教育の一環として波及させることを目指した。

講義「バナナの不思議・手わざマジック」では、日本の伝統や地域社会に根ざした自然と共存する生活や布づくりの英知を基盤に、日頃私たちが口にする食べ物がどのように育っているのか、植物から紙や布がどのようにできているのかを学びながら、自然の恵みに感謝する心と、地球にやさしいモノや考えを促した。また、伝統的な手法で植物から抽出した繊維で糸や布をつくることを、現代社会の環境教育に置き換えて体感しながら自然の恵みに感謝し、活用するすばらしさを共有した。実習「地球にやさしい布づくり」では、100%天然素材を用いた縦150cm、横300cmの大きさのタピスリーを全員で制作し、実習「地球に優しくするためのディスカッション」を行った。本プログラムでは、見て聞いて触って体感する教育を主軸とし大きな成果が得られた。受講生らは、積極的に体験学習に参加するとともに、予想以上に物事を深く考え意見を述べる力を携えていたため、有意義なディスカッションができた。今後の課題は、未来社会を担う受講生達の世代と先端的研究を行う大学研究室およびフィールドである地域社会を結びつけた環境&デザイン教育のためのプログラムのあり方を検討することである。

(7) 研究結果の検証

文化資源としてのテキスタイルの問題点 沖縄、長野、静岡でのフィールドワークの結果、地域の特徴と素材本来の特性をいかしたものづくりが、小規模ながら日本の各地でなされていることがわかった。しかし地域社会では技術者の高齢化が進み、文化資源/遺産を継承すること、現状維持することに精一杯であるように見られ、貴重な文化資源/遺産が現代社会において、十分に活用されていないように見受けられた。沖縄県ではエコツーリズム推進を先駆的に取り込み、観光資源としての自然や自然保護が推進されていたが、テキスタイルを中心とする文化資源の観光資源への活用が、土産物に帰結するなど、十分な配慮がなされていないように思われた。地域社会においては「ものづくり」という発想は定着しているが、ものづくりのデザインの、あるいはものづくりからライフスタイルの統括的なデザインと社会への提案、が欠如しているように見受けられた。

ヨーロッパの多くの地域では、産業革命以降手工芸的なものづくりが急速に消滅し復興させることすら困難な状況下でも、数少ない伝統的な職人技が高級ブランドとして存続し、新たな試みがなされてきた。またデザイン領域や大学研究機関で先端的な取り組みがなされていたことも特徴的である。また欧米のデザイナーらがあえてアジア諸国に残存する伝統的工芸品を再評価し、復

興と再生に尽力する事例も見られた。またデザインに関する概念についても、ヨーロッパではものづくりに帰結することのないデザインという発想が1980年代以降定着しており、DESIS (Design for Social Innovation toward Sustainability) というデザインネットワークがヨーロッパを中心に世界的に発達してきた。研究者らは、地域社会に根ざすこれらの素材や製作技術は、地域の特産品および文化資源として世に知られるだけでなく、地域横断型のデザインを展開する必要性を感じた。従って研究者らの各地域に属さない客観的、中立的、デザイン的な立場から、ハイブリッドなものづくりのかたち、地域横断型、文化横断型のデザインを提案したいと考えた。

(8) 地域/文化/時代をつなぐ持続可能なテキスタイルデザインの提案

伝統的なテキスタイルは従来、ある地域に由来する原料を地域の人々が用いて制作し生活の中で活用する、いわゆる地域に根ざすものである。しかし本研究では、あえて異なる地域や文化、時代に根ざす素材を組み合わせたハイブリッドなテキスタイルデザインを目指した。各地域に由来する優れた素材を組み合わせながら、これまでにないテキスタイルを制作した。また伝統的な用途や制作手法を深く解釈し尊敬の意をはらいながらも、新しい技法を提案した。そして天然由来の素材を使用することで環境に負荷をかけない地球にやさしい制作手法を継承するように心がけた。したがって動力を必要とする機械や薬品による処理は行わず伝統的な制作技法に倣いエコロジカルな制作方法を踏襲した。一方で色や形のデザインや制作技法に関しては再解釈を行いながら検証し、ある地域で継承されてきた制作技法を他の地域の素材に活用するなどの試みを行った。さらに伝統や地域性を十分に想起させるような物語性を強調しながらも、現代社会における日常生活に適応した用途や制作手法のデザインを心がけた。

異なる地域、文化、時代、素材を組み合わせたハイブリッドなデザイン

伝統的に使用されてきた素材と制作技術の深い解釈と継承

天然由来の素材を重要視した環境に負荷をかけない制作手法の継承

伝統や地域性を十分に想起できるような物語性を強調した表現

日常で使用可能なプロダクトデザイン

以上の検証を経て固有の地域や文化に限定することなく「新たな伝統のありかた」を提示するために「地域と文化と時代を自由に繋ぐことのできるテキスタイルデザイン」をコンセプトとし織籠2点、編籠2点を制作した。《織籠1, 2》長野県と西表島の異なる地域、伝統的かつエコロジカルな塩蔵繭と皮芭蕉、絹糸を作成した志村明(長野)と皮芭蕉の作成および製織した亀田恭子(西表島)の異なる染織作家を繋ぎ、研究分担者がデザインお

よび縫製加工を行った。経糸は志村明氏に依頼し、養蚕した塩蔵繭を座繰りで手挽きした塩蔵絹糸を、亀田恭子氏に依頼し植物染料で染色したものを使用した。緯糸には亀田恭子氏に依頼し自ら栽培した芭蕉から外皮部を採取し乾燥させた後に機結びし撚りかけた糸を用いた。製織は亀田恭子氏が行い、籠デザインと縫製は研究分担者が行った。

《編籠1》「アジアのテキスタイル」をテーマに西表島とインド、編みとプリント、皮芭蕉と木綿等の異なる要素を結びつけ地域や文化にこだわらないものづくりに取り組んだ。皮芭蕉は紅露工房の石垣昭子氏のご指導のもと、研究代表者が採取し、かぎ棒編みで籠を作成した。裏布にはインド製のブロックプリントで小花文様を施したアンティーク更紗を使用し、籠デザインと縫製は研究代表者が行った。《編籠2》「アジアとヨーロッパを繋げる」をテーマに、西表島とヨーロッパという異なる地域文化、皮芭蕉と木綿更紗の異なる素材を組み合わせた。皮芭蕉は紅露工房の石垣昭子氏のご指導のもと研究代表者が採取し、かぎ棒編みで籠を作成した。裏布にはヨーロッパ製のブロックプリントで黄色地に茜染料で花文様を施したアンティーク布を使用した。籠デザインと縫製は研究代表者が行った。

(9) 総括

日本の伝統的な染織品に内在する技術や英知について調査し、現代社会における意義と位置づけについて検証し、地域と地域をつなげるテキスタイルデザインを提案した。伝統的なプロダクトを現代社会で再評価し活用するためには「テキスタイルを含むものづくりのみならず、生活全体を包括的にデザインすること」「素材・技術・地域・文化などの垣根を越えたネットワークづくりと領域横断型のデザインの発想」の必要性に至った。本研究の提案は統括的なデザインプロセスの一途にすぎない。地域社会に伝統的に内在する文化資源を未来の社会において活用するためには新しい発想への転換と、現代の情報化社会のネットワークの活用が必須と考えられた。今後の課題を以下に述べる。

テキスタイルを含む文化資源の活用と自然環境の保護・再生の連動

テキスタイルを含む文化資源のエコツーリズム（観光資源）への活用

地域と地域、人と人を繋ぐハイブリッドなデザインネットワークの形成

研究者らの役割は、地域社会を対象にした客観的な学術調査と研究を行い、考察や検証を行いながら現状を把握すること、問題を指摘すること、改善策を地域の人々とともに考えることである。「地域と地域」「人と人」をつなぐネットワークの架け橋となり、伝統的なものを未来に伝えるシステムのかたちをデザインすること、研究成果をデザイン教育に波及させることにより、真の持続可能なデザインを探究していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Yuko Fukatsu, Traditional Textile Design for Social Innovation toward Sustainability in Japan, Textile Society of America Symposium proceedings, Digital Commons@ University of Nebraska, Lincoln(2015)、査読無

深津裕子、織りだされた世界、民族藝術、民族藝術学会編第 32 号、198-199(2016)、査読無

深津裕子、世界の生命樹をめぐる旅、民族藝術、民族藝術学会編第 31 号、168-169(2015)、査読無

深津裕子、テキスタイルアートの行方、民族藝術、民族藝術学会編第 30 号、196-197(2014)、査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

Yuko Fukatsu, Traditional Textile Design for Social Innovation toward Sustainability in Japan, Textile Society of America, UCLA, CA USA 9/11(2014)

〔図書〕(計 0 件)

〔その他〕

ワークショップ：深津裕子、川井由夏 他、平成 27 年度ひらめきときめきサイエンスようこそ大学の研究室へ「バナナの葉っぱや草で地球に優しい布をつくってみよう」(整理番号：HT27095)、2015 年 8 月 1 日、多摩美術大学

報告書：深津裕子、川井由夏、科学研究費助成事業「日本の伝統的染織技術の持続可能なテキスタイルデザインへの展開に関する研究」平成 25 年度～27 年度 基盤研究(C) (2016)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深津 裕子 (FUKATSU, Yuko)
多摩美術大学・美術学部・准教授
研究者番号：20443145

(2) 研究分担者

川井 由夏 (KAWAI, Yuka)
多摩美術大学・美術学部・教授
研究者番号：70407815

(3) 連携研究者

吉川 真由 (YOSHIKAWA, Mayu)
多摩美術大学・美術学部・准教授
研究者番号：20551401

(4) 研究協力者

石垣 昭子 (ISHIGAKI, Akiko)
石垣 金星 (ISHIGAKI, Kinsei)
平良 美恵子 (Taira, Mieko)
亀田 恭子 (KAMEDA, Kyoko)
志村 明 (SHIMURA, Akira)
村井 龍彦 (MURAI, Tatsuhiko)
村井 良子 (MURAI, Ryoko)